

Title	これからのSALC (Self-Access Learning Center) の意義と課題
Author(s)	瀬井, 陽子
Citation	多文化社会と留学生交流 : 大阪大学国際教育交流センター研究論集. 2020, 24, p. 19-25
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/79090
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

これからの SALC (Self-Access Learning Center) の意義と課題

瀬井 陽子*

要 旨

大阪大学マルチリンガル教育センターでは、言語学習を支援する Self-Access Learning Center (以下 SALC) 「OU マルチリンガル・プラザ」の開設を予定している。それにより、留学生等の日本語学習だけでなく複数の言語学習支援が強化されることが期待されている。しかし、SALC は教育機関によって大きく異なり、また転換期を迎えているとも言われている。SALC とはどのような施設なのだろうか。本稿では、まず SALC の定義と課題について概観したのち、視察を行った神田外語大学、千葉大学、国際教養大学における SALC の特徴をそれぞれ述べ、大阪大学 SALC の意義と課題を述べる。

【キーワード】 Self-Access Learning Center、自律学習、学習支援

1 はじめに

海外の大学に設立されている SALC の影響を受け、日本にも SALC と呼ばれる自律学習支援の場が開設されるようになった。大阪大学でもマルチリンガル教育センターが2020年に SALC にあたる「OU マルチリンガル・プラザ」の開設を予定している¹⁾。「OU マルチリンガル・プラザ」では、留学生等の日本語学習、そして日本語話者学生等の英語の支援に加え、外国語学部を有する唯一の国立総合大学の強みを生かし、複数言語の学習を支援する場の構築を目指している。筆者が所属する大阪大学国際教育交流センター日本語チームは、この事業と連携し、留学生等の日本語学習の支援環境を整備する役割を担っている。SALC は教育機関によって、実際に行われている言語支援の内容が異なる。そこで、本稿では、まず SALC とは何を指すのかを明らかにする。それから、視察を行った神田外語大学、千葉大学、国際教養大学における SALC の実践を報告する。そして大阪大学における言語学習支援内容を検討するとともに、これからの SALC 設立の意義と課題を述べる。

2 SALC とラーニング・コモンズ

学習者が自分に必要な学習リソースを必要な時に選択できる場として、海外では1960年頃から SALC が開設されるようになり (Gardner & Miller 1999, p.2)、日本の大学では2000年以降に開設されるようになった (Mynard, 2016)。現在、JASAL (The Japan Association for Self-Access Learning: 日本自律学習学会) には日本にある47か所の SALC が登録されている。各大学の SALC は大学の規模、学生数、学部の種類や数、立地、大学から求められるミッション、授業との連携などの要素によってその実施形態は異なる。また、運営母体も図書館に設置されたラーニング・コモンズや、全学の必修科目を統括する部局、言語教育の専門部局、留学相談などを行う部局など様々である。SALC がラーニング・コモンズの施設内にあるケースも多いことから、まずラーニング・コモンズと SALC の違いを述べる。

2-1 ラーニング・コモンズとは何か

日本の大学でコモンズが次々と開設されるようになったのは2006年以降である (加藤・小山, 2012)。

* 大阪大学国際教育交流センター特任助教

コモンズとは、学生が能動的学修のために集うことのできる共有スペースで、グループ活動エリア、プレゼンテーションエリア、PC 利用エリア等、個人の自習環境に加え、グループワークにも適したこれらの学習環境は「アクティブラーニングスペース」「ラーニング・コモンズ」などの名前で呼ばれている。

文部科学省が調査する「大学における教育内容等の改革状況について」では、2012年よりコモンズについて報告されるようになった。コモンズのような空間を整備・活用している大学は、2011年度は全体の34%である257大学であった（文部科学省，2012）が、2016年度は72.5%の550大学に増加している（文部科学省，2017）。

中山（2016）によると、ラーニング・コモンズは、もともと北米の大学図書館において、情報機器の普及と、インターネット化時代に対応した情報リテラシー能力の養成に重点を置く、学習支援の場としてのインフォメーション・コモンズから発展してきたが、日本において「ラーニング・コモンズ」ということばから想起される空間は、それとはやや異なる文脈で捉えられ、開放的な空間での自由なグループ学習のために設置されてきた。中山（前掲）は、日米を比較し、本来ラーニング・コモンズは教科と結びつけられた学習が起こる空間として設計される必要があるが、アクティブラーニングという新しい教育手法への対応というコンセプトのみで捉えたり、ピアサポートによる学生同士の学び合いの場とだけ捉えたりするのはコモンズの位置づけが不明瞭であると指摘している。

また、上原・赤井・堀（2011）も、ラーニング・コモンズでは情報リテラシー教育も含め、提供し得るサービスを不断に革新していかなければ、「箱物」をもてあますだけで、大学図書館はネットカフェやサロン化してしまうと警鐘を鳴らし、ラーニング・コモンズの可能性を引き出すアイデアが必要であると述べている。

以上のことから、日本の大学のコモンズ設置数は急速に増加したが、もともと北米の大学図書館で発展したラーニング・コモンズとは異なる文脈で設置されてきたこと、能動的学修のために集うというコンセプト以外に、どのような空間かという位置づけを明確にする必要がある。また、教科と結びつけられた学習が起こるような設計、提供するサービスの絶え間ない革新が課題となっていると言える。

2-2 SALC とは何か

コモンズが北米の大学図書館から発達した施設であるのに対し、SALCはヨーロッパの自律的な学習を取り巻く議論の中で発達したと言える。ヨーロッパでは第二次世界大戦後、責任ある市民を育てるため、教育によって学習者オートノミーを育てることが不可欠であるという認識が生まれた。そして1960年以降にフランスのナンシー大学や、イギリスのケンブリッジ大学やベルスクールをはじめ、多くのSALCが設立されるようになった（Gardner & Miller 1999, 青木 2009）。

もともと Self-Access という用語は学習教材と組織システム（学習者が直接アクセスできるように設計されたもの）を指している（Sheerin 1997, p.54）。つまり、SALCの要素として想定されるのは、人的リソースも含めた学習教材とそこにアクセスできるというシステムだけである。

オートノミーを育てるために設立されたSALCであるが、「最先端の設備を整えたSALCが学習者のオートノミーや自律を自動的に保証するわけではない（Cooker & Torpey, 2004, p.11）」、「学習者がセルフアクセスセンターでオートノミーを行使し目標言語能力を発達させる可能性を与えるのは、学習の構造、つまりセンターのデザインや提供するプログラムの指針となる、理論や研究に基づく概念的枠組みである（マレー2011, p.123）」という指摘がある。

関谷・Mynard・Cooker（2010）は、成果を上げているSALCは、以下の要素を備えていると述べている。それは、①学習リソース（印刷教材、マルチメディア教材、オンライン教材など）、②個別学習エリア、③グループワーク用エリア、④学習支援デスク、⑤アドバイジング・サービス、⑥ライティングや発音など特定のスキルを上達させるための専門家によるサポート、⑦学習法などについてのワークショップや催しのプログラム、⑧学習者ができるだけ自然な環境で目標言語を使えるような機会、⑨学習共同体を形成する場、の9つである。

以上のことから、SALCを設立した教育機関が、そのSALCを自律的な学習ができる場、目標言語能力を発達させる場にするためには、教材や場所の提供だけでなく、専門家のサポートや催しなどを取り入れた多角的な設備的・制度的デザインをすることが必要だと言える。

3 SALCの転換期

SALCがヨーロッパではじめに開設されてから50年以上が経ち、SALCは現在転換期を迎えている。Reinders (2012) が「SALCは終わりが来たのか?」と言うほどまでに警鐘を鳴らしているのは、世界中で設立されたSALCのうちの何百または何千の施設は、目に見える物質的な要素を機械的に真似ただけにすぎないという理由からである。学生が1人でコンピューターの前に座り、問題を解く場所となっているSALCを批判し、これからのSALCは施設の内外で、学習リソースを共有し、他者とのコミュニケーションの中で言語学習に関わる問題解決を促進すべきであると強く主張している。テクノロジーの発達によって学習者はSALCに行く代わりに学生同士、教師、目標言語話者、複数の教材やコミュニティにオンラインで繋がるのが可能になった。このような時代において、これからのSALCは実際の場所ベースのサービスに加えて、最新のテクノロジーを活用したオンラインベースのサービスと組み合わせることで、学習者のニーズに合わせた学習サポートができると提案している。

Mynard (2012) はReindersの問いに対し、「もちろんまだSALCに終わりは来ていない」と述べている。そして、SALCを終わりにしないための方針をCooker (2010) に追加する形で次のように挙げている。

Self-access learningは必須ではなくSelf-accessである必要がある／学生はセンターの運営に不可欠な役割を担っている／言語学習は楽しくあるべきだ／学習環境は重要である／SALCはさまざまな種類の学習者に対応する必要がある／学習者トレーニングとアドバイジング・サービスが利用可能である必要がある／目標言語の学習に加え、練習の機会がある必要がある／継続的な発展のため、常にアクションリサーチが不可欠で、センターの事業は決して「完成する／終わる」ことはない／専門的な管理サポートと効率的なシステムが必要である／適切な教材と施設を学生がすぐに利用できるようにする必要があり、重要なのは効果的に学習者が選択し、使用し、振り返りができることである／スタッフの専門能力の継続的な向上が必要である／SALCには明確に定義されたミッションが必要

である／SALCは言語学習者の学習者オートノミーを促進することを目的とすべきである

1960年頃に設立された当初は、SALCに多くの紙の教材が揃えられ、そこでしか自分が学習する目標言語を見る／聞く／読むことができない状況があった。しかし、テクノロジーの発達とともに自宅や外出先などSALC以外の場所で自由に学習リソースにアクセスできるようになった今、従来型の「箱」だけではなく新たな役割を担っていく転換期にあると言える。

4 日本の他大学のSALC視察

これまでに述べたようなSALCの背景や課題を踏まえ、大阪大学へのSALCの導入にあたり、神田外語大学のKUIS8、千葉大学のEnglish House、国際教養大学の言語異文化学修センターを視察した。この3つの施設を選んだ理由は、神田外語大学は早い段階でSALCを開設し自立²⁾学習に関する明確な理念を打ち出していること、千葉大学は国際教養学部で留学の必修化を行うなど、国立総合大学の中では他の大学に先駆けて様々な試みを行っていること、国際教養大学は授業が全て英語で行われ、全員留学が義務付けられているためである。加えて、上記の各大学のSALCはそれぞれ大学内の言語学習の課外サポートをしていることが挙げられる。なお、神田外語大学、千葉大学には2019年9月20日(金)、国際教養大学には2019年11月5日(火)に訪問した。

4-1 神田外語大学

4-1-1 神田外語大学とKUIS8の概要

神田外語大学は2019年度、外国語学部(英米語学科・アジア言語学科・イペロアメリカ言語学科・国際コミュニケーション学科)4,170名、大学院言語科学研究科39名、留学生184名が学ぶ大学である³⁾。SALCが開設された2001年の時点では教室2つ分のスペースであったが、2003年に拡大しSACLAという名前の建物の中にSALCが設立された。さらに2017年、SACLAの2倍の広さを持ち、席を454席増加した2階建て、延床面積5,400㎡のKUIS8が開設されSALCとELI(English Language Institute)が移転した。ELIが学部1、2年生の必修授業のサポート、SALCが授業外のサポートを担っている。KUIS8の

特徴を、1) 施設、2) ラーニングアドバイザー、3) アカデミックサポート、4) 学習コミュニティの点から述べる。

4-1-2 KUIS8の施設概要

KUIS8の1階は、Multi Language Areaとして、日本語を含め、神田外語で学べる専攻言語の利用を可能にし、多くの学生がそれぞれの目的に応じて集えるエリアとなっている。2階は、English onlyでELI教員からアドバイスを受けたり、個人またはグループで英語学習に自由に使ったりするエリアを設けている。施設には、学習のためのスタディ・ルーム11部屋、プレゼンテーションの打合せや練習、ワークショップが行えるスペース、読書スペース、DVDが鑑賞できるスペース、くつろいで歓談できるスペースなどがエリアごとに分かれており、学生が用途に合わせて様々な過ごし方ができるようにデザインされている。建物の右手は比較的静かに過ごす活動、左手は比較的賑やかに過ごす活動向けに設計されているが、ルールはなく、どのエリアでどのような学習活動を行うかは学生に委ねられている。

4-1-3 ラーニングアドバイザー

SALCには12人の専任のラーニングアドバイザーがおり、アドバイザーは授業期間中の決められた時間帯にラーニングヘルプデスクにいる。学生は、予約なしで学習方法やSALCの教材活用法などについて気軽に相談することが可能で、前日までに予約をすれば時間を取ってアドバイザーと話すことも可能である。また、15週間完結型で1単位の自立学習講座、SALCモジュールも開講されている。このモジュールは全学生に提供されており、ラーニングアドバイザーが個々の語学学習ニーズをサポートしながら、自立学習者になる上で必要となる多様なスキルを身につけていく講座である。これ以外に、クラスメートとともにクラス内の学習と自主学習により効果的な学習方法を学ぶ週1コマのエフェクティブランゲージラーニングコースも開講されており、学生が自立学習者になるためのスキルを学べるようコースデザインがされている。

4-1-4 アカデミックサポート

KUIS8の中に、ELI教員たちによるアカデミックサポートデスクが開設されている。事前に予約をす

ることで、プレゼンテーション、スピーキング、ライティングの指導および、相談をすることができる。スピーキングは1対1でもグループでも可能で、ライティングサポートはオンラインの相談も受け付けている。

4-1-5 学生コミュニティ

KUIS8は言語学習を行う場所としてだけでなく、言語学習を通じて交流の場を広げる機会を提供している。共通の目的や興味を持った学生、教員によるラーニングコミュニティがあり、定期的に活動している。また、学生が主体となってイベントを企画し、ワークショップやプレゼンテーションなども行われている。

このように神田外語大学では活発な言語学習活動・交流活動が行われているが、それは教員に強制されたものではない。神田外語大学の教員はKUIS8を学習する場の一つとして紹介するに留まり、無理やり「来させる」というスタンスは取っていない。

4-1-6 神田外語大学におけるSALCの在り方

今回のKUIS8の視察を通し、学生は目標言語を練習するための十分な機会があること、言語学習に関する様々な課題をアドバイザーや専門家に相談できる環境が整っていること、自立学習者を育てるといふ哲学および理念が明確であること、また教職員がそれを共有していることが伺えた。

4-2 千葉大学

4-2-1 千葉大学とEnglish Houseの概要

千葉大学は2019年度現在、10学部（国際教養学部、文学部、法政経学部、教育学部、理学部、工学部、園芸学部、医学部、薬学部、看護学部）10,547名、大学院（11研究科と学府）3,436名、留学生1,861名が学ぶ総合大学である⁴⁾。キャンパスは西千葉、亥鼻、松戸、柏の葉の4キャンパスにまたがるが、English Houseは2013年、国際教養学部、文学部、法政経学部、教育学部、理学部、工学部があり、全学部の1年生が通う西千葉キャンパスに開設された。

English Houseには英語のネイティブスピーカーの教員と外国からの留学生であるStudent Assistantが常駐している。開設された当初は小規模で、英語の資格試験対策やビジネス英語、会話練習など、学生の英語学習を課外でサポートする目的で設立されたが、

スーパーグローバル大学創成支援（グローバル化牽引型）に採択されたことが後押しとなり、語学力やコミュニケーション能力を向上させることに加え、多文化を理解し、国際社会で積極的に活躍できる人材を育成することを念頭に、English House が学内で果たす役割は年を追うごとに拡充されてきた。English House の特徴を、1) 施設、2) サポート内容、3) 授業との連携、4) Student Assistant と学生コミュニティの観点から述べる。

4-2-2 English House の施設概要

English House は大学正門からも見えるアクセスの良い場所に位置しており、100人以上の学生が同時に利用できるような広いスペースが確保されている。大きく分けると、English Support Centre という個人でも居心地よく英語に接することができるようにインテリアに工夫が施されているスペースと、Language Study Space というある程度の人数の学習者がグループでレッスンを受講したり調べ物をしたりしやすいスペースに分かれている。

ヘルプデスクには英語ネイティブスピーカーの教員やサポートスタッフが常駐しており、質問への対応、教材の貸し出し、予約受付などを行っているが、やり取りはすべて英語に限定されている。

4-2-3 サポート内容

English House で提供されている内容は、2013年の開設以来、利用者である学生や教職員の要望に応える形で多岐に渡るようになってきた。

千葉大学の学生、教職員が受講できる、Student Assistant (SA) との1対1の会話練習 (20分)、ネイティブスピーカーの教員による1対1のアカデミックサポート (30分)、毎日昼休みに開催しているランチチャット、各種ワークショップ、学生主体で企画される自立学習型のスタディー・パディ/グループ、パートナーと英語に限らず学びたい言語を教え合う Language Exchange プログラムなどが提供されている。これらに加えて単位が付与される授業もあるが、それについては次項に記す。

4-2-4 授業との連携

English House では、単位が付与される一般教養の科目として、試験対策講座 (IELTS/TOEFL iBT/TOEIC)、English Communication (初級/ビジネス)

が開講されている。

また、普段は普通教室で行われている英語科目であっても、「English House を活用し、幅広い英語に触れること」とシラバスに書かれてあることに加え、「English House にて週1回、2~3人で一組となってグループレッスンに参加し、Web教材で事前に学んだ内容に関してディスカッションする」という課題が与えられている科目があるなど、English House と連携した授業も多数展開されている。

4-2-5 Student Assistant と学生コミュニティ

English House には、ネイティブスピーカーの英語教員とスタッフが常駐しているだけでなく、SAが20名以上いて様々な活動をしていることは特記に値する。SAは、アルバイトとして雇用されている留学生で、国籍も学部や得意分野も異なり、1対1での会話練習のパートナーやディスカッションのメンバーとして学習者と関わる。また、フットサル、映画、カフェ、ナン⁵⁾など学生が企画した英語コミュニティが多数あり、海外の文化を学び、学生同士の交流ができる様々な行事が年間を通して開催されていることも特徴のひとつである。

留学生を含め1万5000人以上の学生が学ぶ千葉大学は、スーパーグローバル大学創成支援の採択校である点、国立総合大学でキャンパスが複数ある点など、大阪大学と共通する部分が多い。2013年にEnglish House が開設されて以来、利用者数や学生コミュニティを増加させてきた方策、Language Exchange プログラムを学内の国際教育を担当するセンターと協同で実施している点、レッスンのオンライン予約の方法、またWebサイトを充実させている点などが参考になるだろう。

4-3 国際教養大学

4-3-1 国際教養大学と言語異文化学修センターの概要

国際教養大学は2019年度、学部生 (国際教養学部) 871名、専門職大学院52名、留学生151人が学ぶ大学である⁶⁾。1年間の海外への交換留学が全学生の義務となっており、語学留学ではなく、留学先で専門の授業を受けることが前提となっているため、授業は完全に英語で行い徹底した教養教育が行われている。また、入学後の1年間は大学の敷地内の寮にある寮で生活することが義務づけられていることからキャンパス内居住率が83%、キャンパス内留学生の

割合が20%となっていることも大きな特徴と言える。

視察した言語異文化学修センター (Language Development and Intercultural Studies Center: 以下 LDIC) は、外国語の自律学修を支援する施設で、能動的学修・評価センター内にある3つの施設のうちのひとつである。なお学修達成センターは大学院または学部生のチューターが個別に学修過程を支援するピアサポートの場であり、アカデミック・キャリア支援センターは大学院進学を検討、予定している学部学生に対する進学のサポートを行うセンターである。LDICの特徴を1) 施設、2) サポート内容、3) カリキュラムとの連携の点から述べる。

4-3-2 LDICの施設概要

国際教養大学は2004年に開学した新しい大学である。LDICは2008年に開設された施設で、入口は建物の2階にあり、隣接する図書館からの出入りも可能である。多目的ルーム、スピーキングルーム、DVDブース、オープン学修スペース、学修ブース、リーディングラウンジが設けられている。教材は語学検定試験対策の本にとどまらず、海外ニュース番組、ミステリーなどの小説、旅のガイドブックなどを揃えている理由は、学生が留学する海外の提携大学は50の国と地域に195大学あり、留学先の公用語が英語以外の場合もあるからである。

4-3-3 カリキュラムとの連携

すでに述べたように、国際教養大学では海外留学が義務付けられている。そのため、新入生は入学後すぐ、授業が始まる前にTOEFL ITPテストを受け、その結果をもって3つのレベルに分けられた英語集中プログラム (English for Academic Purposes: 以下 EAP) を履修する。このプログラムの進級、修了にはTOEFLテストのスコア、各クラスの出席や成績など定められた要件を満たす必要がある。EAPが修了すると、英語で専門を学ぶ準備が整い、基盤教育へと進むのである。EAPのカリキュラムには、ディスカッションで使用する教材の準備や、授業外に週3時間以上英語で多読するなどの「自主言語学修」が組み込まれている。このような課題に取り組むためのサポートをする場として、LDICは教材や設備を提供していると言える。LDICには1人で静かに取り組めるリーディングラウンジがあること、24時間365日開館している図書館に隣接していることも、カリキュ

ラムとの連携が大きく影響していると言える。

国際教養大学では、全学生の英語のスコアが留学や進級に関わる点で、他の大学とはSALCの位置づけが異なると言える。自律的に学びに行く場としてだけでなく、課題の多い学生の取り組みを支援する場として、LDICが役割を果たしていることが伺えた。

5 大阪大学におけるSALCの意義と課題

大阪大学では、2020年のSALC開設に向けて準備を進めている。3大学の視察から、大学の規模、学生数、学部の種類や数によってSALCの在り方が大きく異なることが明らかになったことから、大阪大学の概要も述べておく。大阪大学は2019年度11学部(文学部、人間科学部、外国語学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、基礎工学部)の学部生15,285名、大学院(15の研究科)3,331名、2,594名の留学生在が学んでいる。学部生のうち、理系の学生が約60%を占め、約20%を占める外国語学部では25言語に及ぶ専攻語がある。このような環境において、言語学習をサポートするだけでなく、様々な言語や文化に関心を持つ人が相互に交流し、学び合う場を開設することは大きな意義があると言える。

しかし、課題も多い。すでに述べたように、テクノロジーの発達に伴って学習者はSALCに行かずとも、学生同士、教師、目標言語話者、複数の教材やコミュニティにオンラインで繋がるのが可能になった。これからのSALCが実際の場所ベースのサービスとモバイルテクノロジーを組み合わせることで、学生の個別具体的なニーズに応じた学習がサポートできることは、文献からも視察からも明らかである。そのような中で、オンラインでできること、できないこと、実際に顔を合わせることでできること、できないこと、それぞれを明らかにする必要がある。また、学内における他の関連施設(コモンズや図書館のラーニングサポートデスクなど)との役割の差別化を図り、連携を深めることが重要である。そして今後は特に、SALCを利用する学生の目的や利用状況の把握、学習コミュニティの形成、SALCの恒常的な評価体制づくりなどが今後の課題と言える。

謝辞:

本稿で述べた視察は、神田外語大学 セルフアクセスセ

ンター主任ラーニングアドバイザー ワトキンスサトコ氏、学事部英語教育支援課 茂又佑子課長、千葉大学 小澤弘明副学長・国際教養学部長、国際未来教育基幹 竹蓋順子准教授、国際教養学部 森川セラ准教授、English House スタッフ 松田卓磨氏、国際教養大学 能動的学修・評価センターの Carlos BUD-DING 助教、学修支援室 畑田麻恵氏、専門職大学院 グローバル・コミュニケーション実践研究科 嶋ちはる准教授のご協力により実現した。この場を借りて、感謝を申し上げたい。

注

- 1) マルチリンガル教育センターウェブサイト内の「マルチリンガル教育センター (Center for Multilingual Education) とは」の記述に基づくものである。(https://www.lang.osaka-u.ac.jp/cme/?page_id=81 2019年12月20日確認)
- 2) 神田外語大学発行の冊子「Learner Autonomy」によると、Autonomyの学術和訳は「自律学習」であるが、神田外語大学では、卒業後も自律的な学習者でいてほしいという意味を込めて「自立」を使用している。
- 3) 神田外語大学 HP に基づくものである。(https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/ 2019年12月20日確認)
- 4) 千葉大学 HP に基づくものである。(http://www.chiba-u.ac.jp/ 2019年12月20日確認)
- 5) 料理の名前が由来で、インド料理を囲み交流を深めるコミュニティの名前。
- 6) 国際教養大学 HP に基づくものである。(https://web.aiu.ac.jp/ 2019年12月20日確認)

参考文献

- 青木直子 (2009) 「学習者オートノミー概論」授業がかわる CEFR と学習者オートノミー 2009年フランス日本語教師会研修会, pp.61-77.
- 上原恵美・赤井規見・堀一成 (2011) ラーニング・コモンズ:そこを何をするのか, 何がやれるのか (特集) 図書館実践 (サービス) の最前線 1), 図書館界 63(3), pp.254-259
- 加藤信哉・小山憲司 (2012) 「ラーニング・コモンズ文献案内: 翻訳論文のまえがきに代えて」加藤信哉・

- 小山憲司 (編著) 『ラーニング・コモンズ—大学図書館の新しいかたち—』勁草書房, pp.1-24.
- 関谷, Maynard, J., & Cooker, L. (2010). 「学習者の自律を支援するセルフアクセス学習」小嶋英夫, 尾関直子, 廣森友人 (編) 『成長する英語学習者』 pp.193-212, 大修館.
- 中山貴弘 (2016) 「学習支援の拠点としてのラーニング・コモンズ—その日米比較と今後の展望」大学教育研究 (神戸大学), 24, pp.117-129.
- マレー, ギャロルド (2011) 「セルフアクセス言語学習構造とコントロールと責任」青木直子, 中田賀之 (編) 『学習者オートノミー』 pp.123-142, ひつじ書房
- 文部科学省 (2019) 「平成28年度の大学における教育内容等の改革状況について (概要)」https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/04052801/_ics-Files/afieldfile/2019/05/28/1417336_001.pdf (2019年12月20日閲覧)
- Cooker, L. (2010). Some self-access principles. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 1(1), pp.5-9
- Cooker, L., & Torpey, M. (2004). From the classroom to the self-access center: A chronicle of learner-centered curriculum development. *The Language Teacher*, 28(6), pp.11-16.
- Gardner, D., & Miller, L. (1999). *Establishing self-access: From theory to practice*. Cambridge, Cambridge University Press
- Mynard, J. (2012) Does 'Self -access' Still Have Life in it? : A response to Reinders (2012): (ELTWO), 4. ELT-WorldOnline.com
- Mynard, J. (2016). Self-access in Japan: Introduction. *Studies in Self-Access Learning Journal*, 7(4), pp. 331-340.
- Reinders, H. (2012). The end of self-access? *English Language Teaching World Online: Voices from the Classroom (ELTWO)*, 4. ELTWorldOnline.com
- Sheerin, S. (1997). An exploration of the relationship between self-access in independent learning. In P. Benson and P. Voller (Eds.), *Autonomy and independence in language learning* (pp. 54-65). London: Longman